

## 中村 菜穂



イラン・イラク戦争の末期、米国に住む英訳者のもとに、ある小説の原稿がいくつかの封書のかたちで届けられた。戦時下の牢獄に

囚われた一人の詩人を主人公とするこの物語は、イラン当局の検閲を逃れ、一九九〇年に英訳として出版される。作者の身の安全のため作家名は伏せられ、当時すでに複数の書き手が使用していたマヌーチェフル・イーラーニーという仮名が用いられた。

ペルシア語の原作がスウェーデンで出版されたのは、それから約十年後、作者とされるイランの著名な作家フーシャング・ゴルシーリー (Hushang Golshiri, 一九三八—二〇〇〇年) が亡くなった翌年のことだった。出版者による前書きは、文体の特徴から、この作品がゴルシーリーのものである可能性が高いと断じたうえで、あくまでこの作家「に帰せられる」作品と

している。

ゴルシーリーといえば、長い経験と実績をもつイラン屈指の作家として知られている。代表作の一つに、近代のガージャール朝貴族の没落を描いた『エフテジャーブ王子 (Shah-e Sazandeh)』(一九六八年)があるが、そのなかで用いられた「意識の流れ」を映し出す文体は、『黒衣の民の王 (Shah-e Sazandeh)』にも通じている。一人の人物の記憶を辿るように語り出されるこの内的独白の手法は、時間や空間といった様々なレベルでの飛躍と想像力の展開が可能にし、同時に読者の意識をも時空間の定まらない物語の迷宮に誘い込んでいく。

作品の背景となっている対イラク戦争は、一九八〇年、イランによる「イスラーム革命の輸出」を恐れたイラクがイランに侵攻して始まった。イランにとっては「押し付けられた戦争」であったが、その一方で、ホメイニーを最高指導者として新たに構築されたイスラーム体制が国民に対し「聖戦」を呼びかけ、イラクとイラクを支援する先進諸国の国際的圧力への抵抗をうたうことで、イスラーム革命の国家的イデオロギーをむしろ強化していく契機となった。国際的な構図においては、イスラーム革命の影響が周辺地域に及ぶことを阻止するという名目のもと、先進諸国はイラクを軍事、経済面で支援し、またイランに対しても諸外国から密

かな軍事支援が行われた。イラン側は正規軍に加え革命防衛隊や義勇兵を動員、老人や子供を含む人々による人海戦術を多用し、最終的に百万人にもおよぶ死傷者を出したといわれる。体制やメディアは、この戦いをシリア派信仰における殉教の観念、すなわちカルバラーでの第三代イマーム・ホセインの犠牲になぞらえた。本作品の中で言及されるように、軍事作戦がカルバラーと命名され、殉教者となった若き戦死者を悼むための装飾(ヘジレ)が街角に並んだ。

シリア派では、イスラーム暦の第一月、モハラム月十日に、アーシューラーと呼ばれるホセインの追悼儀礼がある。この行事において人々は黒い衣服をまとい、行列をなして歩きながら、手や鎖で自らの身体を叩き、哀悼の意を表す。この服喪の主題はこの作品を読むうえで一つの鍵となるだろう。主人公が国外で出版した詩集のタイトルである『災禍の十年』<sup>دهشتگاه ده ساله</sup>、また作中で繰り返される「十年」という年月にも、アラビア語で「十」を表すこの「アーシューラー」の響きを、さらに国全体を覆う人々の「服喪」への含意を読み取ることができる。それは苦しみ耐え抜かねばならない「災禍の」年月であり、実のところ、どれほど長く続くのかもわからない。だがしかし、主人公を悩ませ、苦しめ続けているのは戦争だけではない。

獄中で繰り返される拷問と処刑。体制による

言論弾圧はイスラーム体制下であろうと、パフラヴィー朝の王政下であろうと存続し、また歴史においても繰り返されてきた。一人の作家あるいは詩人にとって、体制による検閲や統制との闘いは、何より文学の内実や作品の生命に関わる問題である。己の身を守ることと芸術的要求との葛藤、あるいは主人公が鋭く問いかけているように、表現や行動における「二重性」、比喩的暗示や内的な矛盾といった要素は、ペルシア文学が長く根本的に抱えてきた問題でもあった。

この作品には多くのペルシア語の古典作品への言及があるが、なかでもニザーミーのロマンズ叙事詩『七王妃物語』からの引用や暗示が基調となっている。王は黒衣の謎を追いかけて行った末、自らも黒衣をまとう者となる。ニザーミーの想像力に富んだ物語はそれ自体が魅力的だが、獄中の主人公が明日処刑される人々に向かって語るのには囚人たちの現実とはほとんどかけ離れた、享樂的ともいえる、性的欲望を喚起する場面である。この著しい対照は、複雑な相貌をもったサルマドの人物像にも現れているようである。彼はごく普通の若者のようにも見え、一方で、「永遠」を意味する名をもち、並外れた記憶の持ち主でもある。物語の時空間のなかで、彼はすでに「一千年」を生きているようであり、後半で語られる彼の容貌は、まさしく

ペルシア詩の古典の抒情詩に典型的な「恋人」の姿に似通っている。サルマドは主人公に対して、自ら「改悛者(タツヴァーブ)」すなわち体制への帰順者であることを明かす。その壮絶な経歴は物語の最深部をなしている。

作品中にはそのほかペルシア詩の歴史上最も古い九世紀の大詩人ルーダキーの抒情詩に始まり、「獄中詩」で知られたマスウード・サアド・サルマーン、イランの人々が愛誦する民族叙事詩『王書』、流麗な描写を用いた頌詩詩人ファツロヒ・スイスターニーといった古典の作品や詩人たちが登場する。

作家であるゴルシーリー自身、かつては詩人を志したこともあったといわれ、小説家に転じた後も詩の批評を行なっている。同時代において、彼が特別な敬意を払っているのは詩人ニーマー・ユーシージである。古典定型詩の揺るがぬ原則であった対句を廃止し、独自の自由韻律を創始したことによって、現代詩の祖と呼ばれる人物である。作中ではニーマー以後の詩人については語られないものの、ほかならぬ主人公がその道の人であることは確かである。文中に引用されたポール・エリユアルの詩が、イランの反体制詩人として有名なアフマド・シャームルーの訳から採られていることや、革命の頃に「よく売れた」詩人とされていることから、この詩人がモデルの一人であろうという推測が

成り立つ。だが、現代詩のたどった道のりについて、主人公が述べる批評は決して楽観的なものではない。かつて、革命前には民衆の導き手を自認した詩人たちであったが、この時代にその肩書はもはや通用しない。そこには、読者や社会と対峙することになった二〇世紀以後の文学の課題が暗示されているといえるだろう。主人公がいかに体制に抗うとしても、その詩がいったいどのような現実を資するのか。多くの人々と同様に、彼もまた、自国の戦争といえども「テレビで」見ているのであって、数多くの若者たちが戦場へと向かっていく現実に対して何らなす術をもたないのだ。その点で、主人公が囚われている牢獄はまた別の意味で、詩人や作家たちの社会からの孤絶を暗示しているかのようである。

サルマドの身に起こる凄惨をきわめる出来事は、おそらくイランの多くの若者たちの現実と心象の経歴を映しているだろう。イランの社会そのものである彼らに、果たして文学は有効な救いの手立てとなるのか。「それを読んだら、引き金を自分の口に向かって引かないで済むような何かだ」——後半で語り出される主人公の独白には、作家の文学に賭ける信念が託されているように思われる。

\* \* \*

作品の前半部は『中東現代文学選2016』に収録されている。訳出にあたっては以下を参照した。

- Manuchehr Irani, *King of the benighted*, tr. Abbas Milani, Washington D.C.: Mage Publishers, 1990.
- attribué à Houchang Golehri, *Le Roi des Noirs-Véus*, tr. Christophe Balay, Paris : Inventaire, 2002.



テヘランの街角に置かれたヘジレ。もとは「新婚の部屋」を意味し、未婚のまま戦没した若者の追悼のために設えられた。写真は1985～1986年。原隆一氏撮影。